

中島敦全集

第一卷



筑摩書房

中島敦全集第一卷

昭和五十一年三月十五日初版第一刷発行
昭和五十一年五月二十日初版第三刷発行

著 者 中 島 敦

發行者 井 上 達 三

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—九一

電話 東京(2)七六五一(代表)

振替 東京 六一四—一二三

印刷 大日本法令印刷株式會社
製本 矢嶋製本株式會社

目次

作品

斗南先生	五
虎符	三七
過去帳	
かめれおん日記	七一
狼疾記	一〇一
古譚	
狐憑	一三三
木乃伊	一四三
山月記	一五一
文字禍	一六一
光と風と夢	一七一
わが西遊記	

悟淨出世……………	二八九
悟淨歎異……………	三二七
南島譚……………	
幸福……………	三三五
夫婦……………	三四五
雞……………	三五九
環礁……………	三七三
古俗……………	
盈虛……………	四二九
牛人……………	四四三
名人傳……………	四五三
弟子……………	四六三
李陵……………	五〇一
章魚木の下で（遺稿）……………	五四七

解題

.....

五五五

校異

.....

五七九

中島敦全集第一卷

作品

斗南先生

一

雲海蒼茫 佐渡ノ洲

郎ヲ思ウテ 一日三秋ノ愁

四十九里 風波惡シ

渡ラント欲スレド 妾ガ身自由ナラズ

はゝあ、來いとゆたとて行かりよか佐渡へだな、と思つた。題を見ると、戯翻竹枝とある。

それは彼の伯父の詩文集であつた。伯父は一昨年（昭和五年）の夏死んだ。その遺稿が纏められて、此の春、文求堂から上梓されたのである。清末の碩儒で、今は滿洲國にゐる羅振玉氏が其の序文を書いてゐる。

その序に云ふ。

「予往歲滬江（上海のこと）ニ寓居ス。先後十年間、東邦ノ賢豪長者、道ニ滬上ニ出ヅルモノ、縞紵ノ歡ヲ聯ネザルハナシ。一日味爽、櫛沐ニ方リ、打門ノ聲甚ダ急ナルヲ聞キ、樓欄ニ憑ツテ之ヲ觀ルニ、客アリ。清癯鶴ノ如シ。戸ニ當リテ立ツ。スミヤカニ倒屣シテ之ヲ迎フ。既ニシテ門ニ入り名刺ヲ出ダス。日

本男子中島端ト書ス。懷中ノ楮墨ヲ探リテ予ト筆談ス。東亞ノ情勢ヲ指陳シテ、傾刻十餘紙ヲ盡ス。予洒然トシテ之ヲ敬ス。行クニノゾンデ、繼イデ見シコトヲ約シ、ソノ館舍ヲ詢ヘバ、豐陽館ナリトイフ。翌日往イテ之ヲ訪ヘバ、則チ已ニ行ケリ矣。……………」

これは又恐ろしく時代離れのした世界である。が、「日本男子云々」の名刺といひ、「打門ノ聲甚ダ急」といひ、「清癯鶴ノ如シ」といひ、「翌日訪ねると、もう何處かへ行つて了つてゐた」といひ、生前の伯父を知つてゐる者には、如何にも其の風貌を彷彿させる描寫なのだ。三造は之を讀みながら、微笑せずにはゐられなかつた。彼は、此の書物を、大學と高等學校の圖書館へ納めに行くやうに、家人から頼まれてゐた。けれども、自分の伯父の著書を——それも全然無名の一漢詩客に過ぎなかつた伯父の詩文集を、堂々と圖書館へ持込むことについて、多分の恥づかしさを覺えないわけに行かなかつた。三造は躊躇を重ねて、容易に持つて行かなかつた。そして、毎日机の上でひろげては繰返して眺めてゐた。讀んで行く中に、狷介にして善く罵り、人をゆるすことを知らなかつた伯父の姿が鮮やかに浮かんて來るのである。羅振玉氏の序文には又云ふ。「聞ク、君潔癖アリ。終身婦人ヲ近ヅケズ。遺命ニ、吾レ死スルノ後、速ヤカニ火化ヲ行ヒ骨灰ヲ太平洋ニ散ゼヨ。マサニ鬼雄トナツテ、異日兵ヲ以テ吾ガ國ニ臨ムモノアラバ、神風トナツテ之ヲ禦グベシト。家人謹シンデ、ソノ言ニ遵フ。……………」

これは凡て事實であつた。伯父の骨は、親戚の一人が汽船の上から、遺命通り、熊野灘に投じたのである。伯父は、さうして鯨さかまたか何かになつてアメリカの軍艦を喰べて了ふつもりであつたのである。

他人に在つては氣障きざや滑稽に見える此のやうな事が、(この様な遺言や、その他、數々の奇行奇言などが)あとで考へて見れば滑稽ではあつても、伯父と面接してゐる場合には、極めて似付かはしくさへ見えるやう

な、そのやうな老人で伯父はあつた。それでも、高等學校の時分、三造には、此の伯父の斯うした時代離れのした嚴格さが、甚だ氣障な厭味いひななものに見えた。伯父が、自分の魂の底から、少しも己おのれを欺くことなしに、それを正しいと信じて其の様な言行をしてゐるとは、到底彼には信じられなかつたのである。其處に、彼と伯父との間に、どうにもならない溝があつた。事實彼と伯父との間には丁度半世紀の年齢の隔たりがあつた。死んだ時、伯父は七十二で、三造は其の時廿二であつた。

親戚の多くが、三造の氣質を伯父に似てゐると云つた。殊に年上の従姉の一人は、彼が年をとつて伯父の様にならなければいゝが、と、口癖のやうに云つてゐた。其の言葉が部分的には當つてゐることを、三造も認めないわけには行かなかつた。そして、それだけ、彼には、伯父の落著のない性行が——それが自分に最も多く傳はつてゐるらしい所の——苦々にくにくしく思はれるのであつた。其の伯父の直ぐ下の弟——つまり三造にとつては齊ひとしく伯父であるが——の、極端に何も求むる所のない、落著いた學究的態度の方が、彼には遙かに好もしくうつつた。その二番目の伯父は、そのやうにして古代文字などを研究しながら、別にその研究の結果を世に問はうとするでもなく、東京の眞中に居ながら、髪を牛若丸のやうに結び、二尺近くも白髻びやくを貯へて隠者のやうに暮してゐた。その「お髻の伯父」(甥達はさう呼んでゐた。)の物靜かさに對して、上の伯父の狂躁性を帯びた峻嚴が、彼には、大人げなく見えたのである。似てゐると云はれる度に彼は、いつも、いやな思ひをしてゐた。伯父は幼時から非常な秀才であつたといふ。六歳にして書を讀み、十三歳にして漢詩漢文を能くしたといふから儒學的な俊才であつたには違ひない。にもかゝらず、一生、何らのまとまつた仕事もせず、志を得ないで、世を罵り人を罵りながら死んで行つたのである。前の遺稿の序文にもあつたやうに、伯父は妻をめとらなかつた。それが何に原因するものであるかを三造は知らない。伯父は又常に、

三造には無目的としか思へないやうな旅行を繰返してゐた。支那には長く渡つてゐた。それは伯父自身が云ふ如く、國事を憂へて、といふよりも、單に、そのロマンティズムにエグゾティシズムにそゝられたためと云つた方がいゝのではないかと、高等學校時代の三造は考へてゐた。この彷徨者魂は彼の一生に絶えずつきまとつてゐたやうに見える。三造の知つてゐるかぎり伯父は常に居をかへたり旅行したりしてゐたやうであつた。この彷徨を好む氣質が自分にも甚だ多く傳はつてゐることを、三造は時々強く感じなければならなかつた。たゞ、伯父の生活の經濟的方面は久しく彼の謎であつた。伯父はかつて、「支那分割の運命」なる本を出したことがあつた。が、そんな賣れない本から印税がはひる筈はなかつた。大分後になつて、（それは伯父の晩年になつてからのことであるが）伯父は經濟的には殆ど全部他人の——友人や弟達や弟子達の——援助を受けてゐることが分つた時、三造は、先づ、この點に向つて、心の中で伯父を非難した。自分で一人前の生活もできないのに、徒らに人を罵るなぞは、あまり感心できないと、彼は考へたのである。あとから考へると、これらの非難は多く、自己に類似した精神の型に對する彼自身の反射的反撥から生れたものゝやうでもあつた。とにかく、彼は、自分がそれに似てゐるといはれる此の伯父の精神的特徴の一つ一つに向つて、一々意地の悪い批判の眼を向けようとしてゐた。それは確かに一種の自己嫌惡であつた。高等學校時代の或る時期の彼の努力は、この伯父の精神と彼自身の精神とに共通するいくつかの厭ふべき特質を克服することに注がれてゐた。その彼の意圖は不當ではなかつたにも拘はらず、なほ、當時の彼の、伯父に對する見方は、不充分でもあり、又、誤つてもゐたやうである。即ち、伯父の奇矯な言動は、それが青年の三造にとつて滑稽であり、いやみであると同じ程度に、彼よりも半世紀前に生れた伯父自身にとつては、極めて自然であり、純粹なものであるといふことが、彼には全身的に理解できなかつたのである。伯父は、いつてみれば、昔風